リレー随筆

忠犬？「マリン」

鹿児島県立姶良病院　**今村　研介**

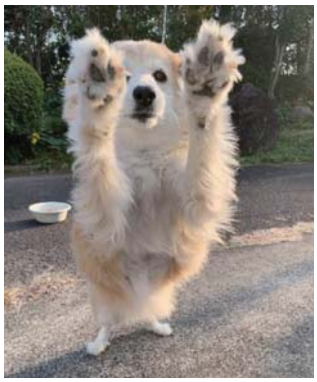
この度，「リレー随筆」を担当させていただくことになりました，今村研介と申します。現在医師5年目，鹿児島大学病院神経科精神科に入局し，現在は県立姶良病院に勤務しております。普段から依頼があると，あまり考えずに引き受けることが多く，今回は同じ職場に勤務されている先輩医師の冨永佳吾先生からご依頼があり，担当させていただくことになりましたが，作成段階になり，自分でよかったのか不安に思い始めています。もともと国語が大の苦手で，完読した本も数えるくらいしか記憶になく，現在もカンファレンス等で漢字の読み方を指導されることも多々ある次第です。そのため，拙い文章となりますが，お付き合いいただければ幸いです。

私の実家には13歳になる雑種のワンちゃんがいます。雑種ですが，柴犬っぽさが50%で，中型犬ですがレトリバー系も20%程入っているのではないかと思います。というのも，私が16歳の時に，妹の同級生のワンちゃんに子供が生まれて，そのうちの1匹を家族として迎え入れ，母は柴犬っぽい雑種犬ですが，父は全く不明とのことだったからです。名前が「マリン」になったのは，妹が強く希望したためで，特にこれといった深い意味はないです。

それまでに実家ではペットを飼ったことはなく，幾度もペットを飼いたいと親にお願いしたこともありましたが承諾は得られず諦めていました。しかし，末っ子の妹のお願いに甘い家族は，近所に子犬が産まれたタイミングもあり，とうとう実家にもワンちゃんが来ました。それは雨の続く，じめじめした梅雨の時期だったと思います。マリンが来たときは生後3カ月ほどだったと記憶しますが，当初は眼も幼犬で半分つぶっており，全然吠えず，寝てばかりいました。しかし，深夜や早朝になると寂しさから，まだ慣れない鳴き声で「キャンキャン」と吠え，なでると鳴くのをやめ，より添ってきます。寝ぼけながらも，とても記憶に残っています。

マリンが初めて吠えたのは，作業の人が家に来たときでした。マリンは日中は庭に繋がれ，頼りない番犬として実家を守ってくれています。夜は玄関内のモフモフした座布団で休みます。マリンはワンちゃんより人間が好きで，散歩中に他のワンちゃんと会うと，ワンちゃんを避けて飼い主の方にすり寄っていきます。来客時にも「キュンキュン」とすり寄っていきます。そのため，マリンはおとなしい性格なのだなと思っていました。その時が来たのは暑い夏も終わろうとしていたときだったと思います。休みの日で家族でソーメンを食べ終わり，昼寝をしようとしたときに，外から聞いたこともないマリンの声が聞こえてきました。それは，「ウーー，ギャン」と立派な吠え声には程遠くはありましたが吠え声でした。外には庭の手入れをいつもしてくれる作業員の男性がいました。作業員の手には大きなゴミ袋があり，それがマリンの番犬心に火をつけたのだと思います。それ以降，忠犬「マリン」はどんどん腕白になっていきました。

中型犬は12カ月で成犬となるみたいです。マリンもどんどん大きくなっていき，吠えることを覚えてからは，何か用があるごとに吠えるようになりました。本来ならばしつけなどが必要な所かもしれませんが，幸い実家は田んぼに囲まれた田舎にあり，のびのびと成長していきました。散歩のときには我先にと



踊る忠犬

駆け出していき，散歩から帰る雰囲気を察知すると，散歩道で寝ころび無言の反抗をします。散歩に行く雰囲気を察知すると，庭に繋がれたチェーンのことも忘れて右に左にと駆け回り，気分が絶頂に達すると，首が苦しくなるのもお構いなしにチェーンに引っ張られた状態で後ろ足二本で立ち，踊りだします。

ワンちゃんにも表情があるのをご存知でしょうか。怒ったり，威嚇したり，喜んだりはありますが，笑うこともあるんです。忠犬「マリン」は時々脱走します。当初は庭に贅沢な屋根付きのゲージを作り，雨の日などはゲージで過ごしました。ある雨の日，家族で買い物を終え夕方くらいに帰ると，いつもは吠えてお迎えをしてくれるマリンですが，その日は違いました。吠える声がせず，今日はいい子だなっと思っていましたが，いるはずのマリンがいなく，ゲージには穴だけが残っていました。忠犬の捜索が始まり，自分は田んぼに向かいました。しばらく探していると，泥だらけになったマリンが田んぼの中にいました。名前を呼ぶと，こちらを振り向き，確かに目が合いました。良かったと思ったのは束の間で，ニヤッと笑い，真逆の方向に華麗に駆けていきました。確かに笑っていたと思います。追いつけるはずもなく，大好物なお菓子を餌になんとか捕まえることに成功し，マリンは達成感でいっぱいといった顔をしていました。

そんな腕白なマリンですが，これまでつらいときには寄り添ってくれ（気がして），腕白なマリンに励まされていたと言っても過言ではないと思います。県外の大学への進学で一緒いられる時間も減り，医師となり鹿児島に帰ってきた現在も会える時間がなかなか作れないでいます。現在は実家には両親とマリンの3人がおり，当初はあまりマリンに関心を示さなかった父も，LINEのアイコンも，いつの間にかマリンとなっており，実家を明るくしているのだと思います。最近では元気だったマリンにも身体の衰えが出始めているようで，胸にできたシコリの手術も複数回行っています。散歩にいっても前みたいに駆けることも少なくなり，散歩の距離も短くなり，散歩から帰るとすぐに横になります。中型犬の寿命は15歳程と言われています。今後もマリンは元気に踊り続けると思いますが，これからの時間も大切にしたいと思います。

まとまりのない文章となりましたが，最後まで読んでいただきありがとうございました。駄文ですが，マリンでこんなに文章がかけるとは思っておらず驚いております。今回の随筆を担当させていただき，忘れかけていた愛犬との思い出が蘇ってきました。今月中に1回は帰省しようと思います。

次号は，出水総合医療センター 腎臓内科 大塚彰行先生のご執筆です。 （編集委員会）